

7月8日に県社会人女子アマ選手権。国体のリハーサルとして。フォアキャディを募る。

第17回栃木県女子社会人アマチュアゴルフ選手権大会は来月8日(木)、当カントリークラブの南、北コースの18ホールズストロークプレー方式で開催される「いちご一会とちぎ国体」の那須塩原市実行委員会では、この大会を来年の国体リハーサル大会としており、会場設営、大会運営など本番さながらに展開される。ただ、選手権出場者がスタート後に南、北コースのみの一般営業も行われる。

会場関係ではクラブハウス玄関手前の左側に総合案内所が設置され、それと並んでコロナ対策の検温所が設けられ、一般客はクラブハウスに入らずに練習場側からコース通路に入る。玄関に入って正面が選手・競技役員の受付、レストラン手前に報道・視察員控え室が置かれ、レストランは表彰式会場となる。クラブハウス別棟には競技、実施、記録本部などが置かれ、競技会役員、大会役員の控え室も確保される。ロッカーは男女が入れ替わり、選手、役員の更衣室となり、ビジターもここを使い、男子ロッカーには救護所が併設される。

コース関係では南がOUT、北がINコースとなりそれぞれ1番がスタートホールとなる。各ホールにフォアキャディが配置されるため、コース委員会の提唱で展開したコース整備のボランティア活動登録者に声をかけるほか、その他のメンバーでも希望者がいれば協力してもらうことにしている。

通常の練習場が指定練習場となり、バンカー練習場は使用禁止となる。駐車関係では屋根付きの駐車場2か所のうち北側部分には弁当引換所が置かれる関係で、屋根付きの南側、別棟前の大駐車場の約170台分が選手、役員など大会関係車両駐車場に充てられる。

大会の参加資格は栃木県内在住・在勤または県ゴルフ場加盟クラブの会員で、参加料3,000円を含め参加費用は13,100円。グロスの部1-3位に記念カップ、賞品、4-10位に賞品、ネットの部(新ペリア36打ち切り)1-10位に賞品が贈られるほか、参加者全員に参加賞が出る。

参加申し込みは県ゴルフ連盟(〒320-0055宇都宮市下戸祭2-2-6,糸井店舗2F)へ郵送またはFAX028-621-0414。申し込みの締め切りは6月15日必着。

菊池選手が優勝。県アマチュア選手権予選(Bブロック)。  
当クラブ4選手が決勝へ。

第35回アマチュアゴルフ選手権大会予選は5月27日、14組49人が参加して当クラブで開かれ、菊池一郎選手が優勝した。今回は準決勝が取りやめとなり34位までが決勝大会に進出出来ることとなり、菊池選手とともに八木沢直道、星真平、大島義彰の計4選手が、7月9日にジュンクラシックカントリークラブ(那珂川町)開かれる決勝に進出した。なお、緑川文雄キャプテン、四ッ谷定男競技委員が予選大会の競技委員を務めた。



クラブ選手権予選、鈴木選手がメダリスト。13日に決勝。

今年度のクラブ選手権予選会が5月30日に、28人が参加して開かれた。鈴木秀幸選手がメダリストに輝き、16人が通過した。6月6日に準決勝、13日に決勝が開催される

上位大会への進出逃す。関東倶楽部対抗予選。

関東倶楽部対抗競技の県予選は、男子が5月20日に芳賀カントリー倶楽部、女子が6月1日に烏山城カントリー倶楽部で開催された。塩原カントリー倶楽部は男子が6位(参加15クラブ)、女子が5位(同24クラブ)で決勝進出はならなかった。優勝は男女ともに芳賀カントリークラブだった。

塩原カントリークラブ！攻略編！！【北コース】 — 中里 鉄也プロ —

☆北コース6番☆



【コース解説】

やや左ドック打ち下ろしのホール！

【中里プロからのアドバイス】

ティーグラウンドからフェアウェイ左の240ヤード付近に松の木が3本あり、右側も距離がでると松林に入ってしまうセカンドショットで楽にグリーンを狙えなくなる為、ティーショットは刻むのもあり。

セカンド地点からは左足下がりで距離感が難しく、手前から攻めたい。

グリーンは手前から奥に傾斜で、奥にマウンドがありラインを読みにくい。

次回は、北コース7番を紹介します!!



## 那須の小天狗・・・小針春芳伝

井上 安正

一九五四(昭和二九)年になると、霞ヶ関の運営にジョンソン基地の司令官が口をはさむことはなくなり、メンバーと同じ料金でプレーを認めるだけで、米軍関係者への気配りはいらなくなった。夕方からの研修生の練習は、その分だけ熱が入ったが、小針はその頃をこう語っている。

「寝ている以外はゴルフ漬けの毎日だった。パッティング、アプローチをやり、ラウンドが終わったら、また、パッティング。競技は雨、風でもあるから、降っても、風が吹いても一生懸命やった。その中でも低い球を打つことにこだわった。低い球はアゲインスト、横風の影響を受けにくい。狭いコースで有効だ。同じ番手で同じ距離を出せるようになるのが前提だが、低いボールで左に引っかけなければ一流だ。これが出来れば勝てると思った」

小針は研修生と一緒にラウンド練習 小針は大陸、南方をまたいだ兵隊生活を振り返り、「人生、何が幸いするかわからない。肝心なのはあきらめちゃならないということ」と思いつつ、散華した戦友にわびる気持ちにとらわれることがあった。色弱のためにあこがれの鉄道員になれなかった。しかし、兵隊になってから、色弱だから、「戦闘現場には不適」として通信隊の無線士に指名された。無線士は戦闘のある前線に出ることはなく、その分だけ戦死のリスクは下がった。

一九四六(昭和二一)年に復員して、那須野が原の地を踏んだ時のことについて、小針が鮮明に覚えていることはない。おそらく、マラリアの高熱が続いていたのだろう。「帰れて良かったかどうかより、ポーとしていたような気がする。これからどうしようとも考えなかった。案外、性格的には行き当たりばったりで、運命には従う方だったから。だって、自分でどうしようと思っても、どうかなるもんじゃないし、生き残りじゃなくて、死に残りという気持ちが強かったから」と振り返っていた。

何をするにも、マラリアの後遺症を直して、体力をつけなければ始まらなかったが、マラリアの治療薬なんてどこを探してもなかった。取りあえずは、休養を兼ねて、実家の農業を手伝うほかはなかった。それからの六年間は、実家の農業を手伝った。農業に打ち込んで四年ほど過ぎたころだったろうか。那須ゴルフ倶楽部の副支配人が訪ねて来てくれた。所属プロとして那須ゴルフ倶楽部に復帰して欲しいということだった。農業の面白さもわかり始めていたし、ゴルフをやれるまでにマラリアが癒えているのかが気がかりだった。

二度断って三度目に、「家族と相談して返事をします」と言ってしまった。副支配人の熱意にほだされたこともあったが、ゴルフへの未練が頭をもたげたかも知れない。父親に相談し、その頃、家にいた勝芳に農業を任せ、那須ゴルフ倶楽部に復帰することになったのは一九五二(昭和二八)のことだった。

実に十年ぶりに握ったクラブの感触は、期待と不安を同時にもたらした。だから、その年は「テスト採用」として扱ってもらった。給料の額は忘れたが、定額支給ではなかったような気がする。翌年には月給二万五千円にしてもらった。三十三歳の春のことだった。小針は那須ゴルフ倶楽部に復帰してからは、使用球の番号を「5」とし、プロ資格を返上するまでそれで通した。「4(死)」線を超えて来たという自負と、そこにさまようことなく超えて行くという決意を込めた。



戦時中、ゴルフそのものは禁止にはならなかったが、風呂敷でゴルフクラブを隠して、ゴルフ場に向かったゴルファーが、青年達に取り囲まれ、「非国民」とののしられ、袋だたきに遭うような事件は起きた。多くのゴルフ場は食料増産のための農地に使われた。そうでなくとも、手つかずのまま、雑草が伸び放題の荒地化がひどかった。

霞ヶ関カンツリー倶楽部も一九四二(昭和一八)年には、食料増産のため農地に転用された。倶楽部で兵役に出なかった社員は「農耕部」という新設セクションに配置され、ジャガイモやサツマイモの栽培に取り組んだ。ほんの数人が将来のコース再建に備えて、ゴルフ場の管理に当たっていた。

那須ゴルフ倶楽部といえば、インコースは全ホールが陸軍療養所の付属耕作訓練場となった。療養所そのものは、那須湯本の温泉旅館が指定され、湯治で回復した傷病兵が食料増産のための農作業に汗を流したり、完全に回復していない兵士が療養のための散歩をしたりしていた。アウトは荒れるにまかせ、周りの雑木林との境も判然としないありさまだった。

戦前から那須ゴルフ倶楽部のレストランで働いていた料理長は、外国航路の客船のコック上がりだった。倶楽部メンバーの別荘には、戦況が激しくなるにつれ、家族や親類などの疎開の人が増えた。この料理長は、そうした人たちの面倒を見続けてありがたがられた。戦時中、那須ゴルフ倶楽部は実質的にこの料理長一人に任せざるを得なくなっていた。外国航路のコックだっただけに、英語が達者で、それが那須ゴルフ倶楽部の復興に役立った。

一九四五(昭和二〇)年八月十五日、昭和天皇の玉音放送で終戦となった。ほどなく、連合軍進駐軍として米軍が全国各地に進駐し、将校用住宅、司令部設営のための建物、公共施設を接收した。米軍の駐屯地近くのゴルフ場は、米軍将兵の娯楽とスポーツの場として接收された。関東の有名ゴルフ場で日本人用として接收を免れたのは、相模原カンツリー倶楽部と我孫子ゴルフ倶楽部だけだった。

狭山、入間市にまたがって、広大なジョンソン基地が構築され、住民があれよあれよと驚く間もなく、軍用機が離発着する米軍基地になった。今の自衛隊入間航空基地だ。霞ヶ関カンツリー倶楽部はその将兵用のゴルフ場として接收された。ジョンソン基地の司令官が倶楽部を訪れ、当時の理事長に提案した。「われわれが、大型機械を出して修理をして芝を張りましょう。その代わり作業員はそちらで調達して欲しい」。機械は米軍、人員は日本ということである。あつたとしても、倶楽部が拒否する理由を口にするなど思いもよらなかった。

驚くことに、一年後にはイモ畑をゴルフコースに戻してしまった。接收中といっても、米兵専用ではなく日本人のプレーも許されてはいたが、日本人プレーヤーは数えるほどだった。那須ゴルフ倶楽部周辺からも、戦後間もなく傷病兵の姿も見えなくなって、一九四九(二四)年には、イン、アウトとも全コースが再開にこぎつけた。別荘を持つメンバーが多かったから、再開への機運の盛り上がりも早く強かった。



しかし、コース整備に機械を使いたかったが、ガソリンがなくては動かない。外国航路のコックだったレストランの料理長は、宇都宮の米軍キャンプに乗り込んで、得意の英語を使って、ガソリンを持参すれば、プレーを認めると耳打ちして回った。ゴルフ好きの米兵達は、ジープにガソリンタンクを積んでやってきては、プレーを楽しんで帰った。このガソリンを使って芝刈り機を動かし、コースの整備は飛躍的に早まった。

霞ヶ関カンツリー倶楽部で長く所属プロを勤め、今は嘱託プロの肩書きに変わった元プロの竹間正雄。八十六歳。

「私もこの霞ヶ関でキャディーとして、ゴルフ人生をスタートしました。私がここに入った年の冬には、小針さんは研修生として那須から来ていました。最初に会った時、『二年前から来ている』と聞きました。とにかく、練習の虫でした」

当時、霞ヶ関には冬場になると小針ばかりではなく、北海道、九州、千葉などのゴルフ場から七、八人の研修生が修業に来ていた。周辺の民家の一間を借りて、下宿する者もいれば、小針のように、倶楽部の合宿所で寝泊する者もいた。

(つづく)





## 編集後記

来月 8 日に開かれる県女子社会人アマゴルフ選手権も来年の国体女子競技のリハーサル大会となり、受け入れ体制の整備も臨戦態勢となっている。那須塩原市の実行委員会からフォアキャディの調達要請があったが、コース整備のボランティア登録者に声をかけることで、要請に応えることが出来そうだという。

このボランティアは「コース整備に少しでも協力を」とコース委員会が提唱して、コロナ禍を跳ね返すように始まったシステム。プロのトーナメントでは運営補助者専門の派遣会社があり、そうした会社に登録しておけば、全国各地の大会会場を渡り歩くことが出来、もらった報酬で周辺の観光地巡りをしている人もいるという。アマの大会ではそんな経費をまかなえないから、今にして思えば、当クラブのボランティア登録システムは大きな“ヒット”だった。本番の国体での協力も期待したい。

井上安正

